

---

# 悪魔な天使と天使な悪魔（仮）

オレオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔な天使と天使な悪魔（仮）

### 【Nコード】

N4564T

### 【作者名】

オレオ

### 【あらすじ】

普通な主人公と悪友と双子が中心のコメディー系短編小説です。

**（前書き）**

初投稿です。  
ています

一応これをあまり変えずに連載していきたいと考え

【????】

ちゅんちゅん。

スズメ？の鳴き声が聞こえる4月下旬。

俺この時期好きなんだよなあー。だって暑くもないし寒くもない最高だよな？

なにより昼寝にはちょうどいい温度だよな？

しかも、ここの神社ってあんま参拝客こねえし。

つか管理人？的な人ここの近くに住んでねえしな。

よし、もう少し寝よう。

「・・・・・・・・」

ん？なんだ？女の子の声？みたいなのが聞こえるけど・・・・・・・・。

まあ

真生か？にしては声が高すぎるよな？

んじゃあ、参拝客か。まあ木陰の裏手の方だし正面からじゃ見えんだろ。

とうか・・

「ねえ、冬華。これなんだと思う？」

「んー？和尚さん？」

「・・・あんたに聞いたあたしがバカだった。」

ん？なんか声が近いんですけど・・・

「あつ！」

「ごっ！」

「ざばあああ！！！」

「冷たっ！！！！！」

なんで、いきなり俺の顔面に水が！？雨漏りか！？ふざけんな！

「あつ、起きた。」

「す・・・す・・・すみません！！！」

「あちゃー、こりゃシャワー浴びて服乾かさんと風邪ひくな・・・ん？」

俺の目の前には大荷物を抱えた二人の少女がいた。

一人はさつきから俺に謝っている黒髪に碧眼という神秘的な美少女。もう一人は白髪黒眼といういかにも2次元のお方ですか？と思ったくなるような美少女。

「てか双子！？」

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！わたしがバケツを蹴ってしまったばかりに！！！」

「いや、俺は別に大丈夫だから・・・」

「そうよ、冬華。そもそもこいつがあたまの方にバケツおいとくのが悪いのよ。」

あいか

「だめだよ・・・愛華あ。そんなこといっちゃあ・・・。」

なんなんだこいつら・・・？特に白髪の方すげえいらつく。  
まあそれより服乾かしてシャワー浴びんとな・・・

「んじゃあ、俺は家に帰るんで。」

そういつて立ち去ろうとすると、黒髪の方がこっちに近づいてきた。

「あの、よかつたらこれ使ってください！」

親切だなあと思って目を落として見ると

n？なnですかコレ？

淡いピンク色で三角形のタオルなんて初めてみるなあ・・・

「ちよつと！冬華！それあんたの下着でしょ！？」

え・・・mjd？

「やだなあ、愛華。わたしがそんなものだすわけ・・・きやー  
—————！」

・・・ごちそうさまです。

「ほら、これ使いなさい。冬華のだけど・・・。」

タオルを差し出されてしまった。普通なら遠慮するべきなんだろうけど、ここは素直に受け取るところ。

「ありがとう。んじゃ。」

簡単にお礼をいって足早に俺は自分の家にむかった。つってもこの神社の階段おりたらずぐなんだけどね。

帰る途中タオルを使わせてもらった。

きれいな花柄のタオルで

なんつつか・・・すげえいい香りがした。

ちよつと幸せな気分になりながら俺は家にかえった

「ただいまー。」

誰もいないとっついていてもなんとなく言っってしまう。

親父の仕事で母も一緒にいつてしまった。

つまりこの家には誰もいないはずなのだが・・・

れい

「お、零か。お帰り」

かんざき まお

なんと迎えてくれたのは神崎 真生

あつ、真生は男ですよ。浅田真 ではありません。

てかあんた、不法侵入ですよ？・・・

「つか、鍵かけといたんだけど・・・まさかお前」

「ああ、ピッキングしたから」

アウトおおおおお！！！！

「・・・まあ、いいか。」

真生はこんなんだけど俺の悪友だ。幼稚園からの付き合いだしな  
小中高と一緒に過ごした。

あつ、勘違いしないでね。俺はノーマルですよ。

「何だったってんの？」

こんな感じでいつも真生とあることをしています。

えっ？なにやってるかって？それはまた後日ということだ。

数時間後

「じゃあな。また学校で」

「うい」

神社の前で真生をみおくって

俺は神社に向かった

なぜかって？神社に行くことが癖になってるのさ！

1日に3回くらいはいつてるからな・・・

あつ、一応タオルはもってきてます。いればいいんだけど観光客つ  
ぽかったからなあ

こんなところに観光しにくるのもどうかとおもっけど・・・

そんなことをかんがえていると階段を上り終わり、神社についた。

「あつ！」

いた。昼んときの双子。

二人は神社の小さな石段に肩を寄せて寝ていた。



俺は近寄って腰を落としまじとみてる  
しかしホントにてんなーこいつら。

髪色と眼の色以外ほんと変わらん  
体の凹凸まで……

「ん？……あんた昼間の……てかなにじろじろ見てんの？」

おお白髪が起きた。黒髪はまだねてんな……。

「ああ……あつ！そうこれ返そうかなと思って。」

俺はタオルを差し出す

「礼はこの子にいつてやって」

タオルを受け取りながらそういつて白髪は黒髪を指差す。

「まあ、礼としちゃんだがこの町のことくらいは知ってるから  
んでも聞いてくれ。あんたら観光客っぽいし、宿とかに戻らな  
くいいのか？」

かんざき

「ああ、観光ではないんだけどね……あつ！そうだ！あんた神社  
の近くの家の神崎って人の家知ってる？」

ん？神崎……えーと。

「それたぶん俺んちのことだと思うけど……」

「あ、そうなの？前にいたところの人のからその家にまずいけつて

いわれてるから・・・んじゃ悪いけど案内してくれる?」

変なフラグが立った気が・・・いやぁないないあるはずない

「ほら!冬華!起きなさい!」

「んう?愛華おはよー。」

「寝ぼけてないで行くわよ。行き先がわかったわ。こいつんちよ」

すみません。指差さないでください・・・

「ええ?あれ?この人どつかで・・・あ・・・さっきはごめんなさい!」

顔をトマトのように赤くして謝ってくる。

きにしないでいいですよーむしろごちそうさまって感じです・・・

「んじゃ、とりあえず行こうか」

「え・・・どこに?」

この子話聞いてたか?

「だからこいつんちっていつてるでしょ!ほら!さっさといくわよ!」

玄関前

「ただいまー」

まあ誰もいないんだけど・・・

「「おかえり」」

あれえーおかしいな幻覚&幻聴がきこえるんだけど

「残念ながら幻覚でもないし幻聴でもないんだなあ」

そこにはイケメンな俺の悪友がニヤツと笑っている。  
でも、なんでさっき帰らしたのに・・・

「それは、私が呼んだんだ。」

ゆず

「柚姉え！どしたのうちにくるなんて？」

姉とわ言っても親戚の姉ちゃん今年齢はたしか・・・

「零、それ以上考えると成績オール1にするぞ」

「うそうそ！！ごめんなさい！！」  
きりさき

あきさくら

霧咲 柚 年齢20代半ば、後半で若くして俺と真生が通っている  
私立秋桜高校の理事長様である。

「はい、お前オール1決定」

なぜ、俺の心を読めるんだ！？

つか、大事なことわすれてた・・・

「柚姉えこの二人なんだけど……」

まなと

「ああ、愛斗さんから聞いてるぞ。冬華と愛華だろ」

愛斗ってのは俺親父ね。源氏名みたいな名前だけど本名だからね。

「いや、お前の名前も十分源氏名っぽいから。」

真生、てめえーにはいわれたかねえよ！

「はいはい、そこまで悪ガキども。んで双子、なんでここにきたか知ってるのか？」

「いえ、あたしたちはなにも……ここにすればわかるって祖父母にいわれてるので」

「なるほど、んじやいい機会だし全員よくきけ、これから……とりあえず2年間か？うちで雨宮 冬華と愛華の二人をこの家で預かることになった。まあ家賃とか食費とかは主に雪野神社の巫女？的な仕事をしてくれればいい。てなわけで仲良く暮らすよーに」

「……えええええー！！！！」

俺、冬華、愛華の3人がキレイなはもりで絶叫した。

「あつそれと真生もここで暮らすことになったからな。まあいつも家にきてたから家の人間みたいなものだしかまわんだろ。それと零が双子を襲うかもしれない、見張りだ。それと私もここに住まわせてもらうぞ。あまりかえってこれないとおもうがな。」

どうせあんたはエロゲとか夜中理事長室でやってんだろ。

「そんな話きいてないですよ！」

愛華が俺と冬華の気持ちを表して言う。

「まあ理由はおいおい話すから。では私は夕飯の食材をかってくるからな」

そう言い残し柚姉えはいってしまった

「……………何かたまつてんのお前ら？」

逆にお前はすげえ冷静だなおい！

「メンドクせえがなるようになったんだからしょうがねえだろ。それより自己紹介でもしとくか。オレは神崎 真生。不本意だがこいつの悪友だ。」

「不本意な奴でわるかったな。俺は桐野 零。一応この家の住人です。」

「わたしの名前は雨宮 冬華だよ。よく『ふゆか』っていわれるけど『とうか』です。今後ともよろしくねっ」

「あたしは雨宮 愛華。双子だけど冬華の妹になるわ。よろしく。」

まあこんな感じで俺の平和？な日常が始まっていきます

……………てか、俺の憩いの神社があああ——

（後書き）

感想をくれると作者は大変よろこびます  
連載ではさらに面白くしていきますのでぜひよんでください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4564t/>

---

悪魔な天使と天使な悪魔（仮）

2011年10月9日04時02分発行